

2 Da-9 家族のかかわりの一考察 (9)

— “家族のつながり”を通して思春期を考える—

○中村洋子 (お茶の水女大)

目的：この研究は日常生活における思春期の子どもの自己形成に関する連続研究である。今回は“家族のつながり”に着目し、思春期の子が家族のつながりの中で自己形成する関係状況を探究し、それにより家族が変容するかかわりを考究する。

方法：思春期の子ども達へのインタビュー・質問紙 (T歳1・2年生)により、思春期の子の日常生活の中での家族のつながりを①家族の絆とのかかわり②自己の存在を浮き彫りにする関係状況③家族の中で生かしあう関係状況の3項目をとらえ分析する。また心理劇 (1998-2000年0大 女性と家族をめぐる人間関係を考える会)から、思春期の子どもと家族のつながりをとらえ、分析・考察する。

結果・考察：思春期の子は“家族のつながり”の中から、1) 自己の关系的な存在を客観的な視点からとらえる 2) 精神的・肉体的安定の基盤を形成する 3) 自己発展の原動力を促進する等を獲得し、自己形成の一助としていることが明らかになった。また 親が子に模範を見せる・子はみる関係、工夫する・みる関係、教授する・される関係の中で、親と対等な個としてかかわり、互いに関係をつくりあう関係状況が浮かびあがる。“家族のつながり”は、家族の歴史が育てたかかわりであり、バランスを崩しやすい思春期の子を支える関係として重要である。